

433 肝転移の診断、及び治療効果判定の指標としての、血清 Thyroxine-binding globulin の意義について。

照井頌二、小山田日吉丸（国立がんセンターRI）

肝転移の早期診断は、画像上、及び血清学的にも、安易でない。特異的な腫瘍抗原を有する肝癌や、大腸癌では、AFPやCEAをマーカーとして、患者のfollow-upが可能であるが、多くの悪性腫瘍では、未だ、臨床的に有用なマーカーがないのが現状である。我々は肝転移を疑われ、肝シンチグラムを施行された症例について、血清 Thyroxine-binding globulin (TBG) を測定し、TBGが肝転移の診断の指標となりうるか、また、肝転移の治療効果との相関について、肝シンチグラムの所見と合わせて検討した。症例は、原発巣が手術された、転移性肝癌33例である。そのうち、化学療法が施行され、肝シンチグラムで経過がfollow-upされた6例については、治療効果と合わせて検討した。その結果、肝転移例33例中28例(84.8%)にTBGの高値が認められた。また、動注治療が行なわれた乳癌で、治療に相関して、TBGが正常化した症例も認められた。以上の点から、TBGは、臨床的に、肝転移の診断、及び治療効果の指標として十分役立つと考えられる。

434 標識された肝細胞膜糖蛋白受容体を用いた肝機能検査法の開発。

中沢 緑、久保田佳嗣、長谷川武夫、田中敬正（関西医大 放）、鷲野弘明（メジフィジックス）

肝にはアシュアロ糖蛋白質に対する特異的膜受容体が存在し、血中に投与されたアシュアロ糖蛋白質は、速かに肝細胞に攝取され血中から消失し、肝細胞内のライソゾームで分解される。99m-Tcで標識された糖蛋白(Gal₂₇-HSA)を用い、投与直後から肝シンチグラムを作製し、糖蛋白の動態から、肝実質細胞の機能を推定することを目的とする。

現在迄の所、標識率90%の糖蛋白が得られ、これを用い、15 mci/匹を家兎耳静脈より急速に注入後、データ収集(1F/sec)を行なった。収集後、心、肝、腎、膀胱、腸の部分に関心領域を設定し、各部のTime activity curveを求めた。99m-Tc-Gal-HSA注入後、血中より急速に消失し、T_{1/2}は約1.2~2.0分となった。肝へは急速に集積し、約4分で最高に達し、以後は徐々に減衰した。消化管には、ごくわずかし排泄が見られず、胆のうには排泄がなかった。また、99m-Tc-Gal-HSAと他のTcO₄、フチン酸、HSA等の肝シンチ画像と比べ、画質的にも十分価値あるものと考えられた。今後、肝障害のラット、家兎を用い、肝血流量やシンチグラム等を作製し、臨床応用を考えたい。